

心のめばえ

<32>

著者／牟田 泰三
挿絵／橋本 礼子

5歳10カ月
博愛の限界

広島空港のすぐそばに中央森林公園という広大な公園がある。この公園の中に日本庭園「三景園」がある。庭園にある大きな池には巨大な鯉が沢山いて、餌をまいてあげると口を開いて色とりどりの鯉たちが群がってくる。アヤはこの鯉たちに餌をあげるのが大好きで、売店で売っている一袋百円の餌を瞬く間に5〜6袋あげてしまうのである。「ジイジにもやらせてよ」と言うと、ほんの二握りしかくれない。

この日は三景園の奥のアジサイ園が真っ盛りだということで、長い道のりを歩いて行ってみると、本当に色とりどりの珍しいアジサイが満開であった。そのうえ、花菖蒲も咲き誇っていた。

思いがけない目の保養をした帰り道でのことである。とても大きな青虫が道を這っている。きつと木から落ちたのであろう。

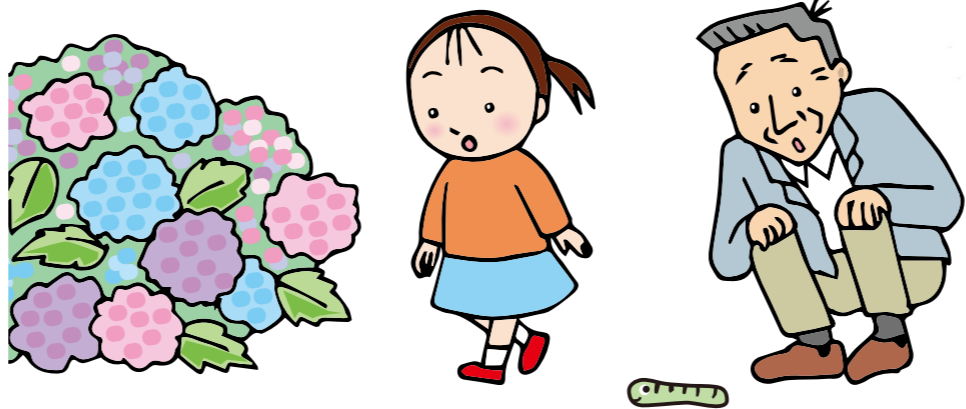
「この青虫はこれからきれいな蝶になるんだよ。人に踏まれたりしたら可哀想だね。木に戻してあげよう」とジイジが言うと、アヤは

「いいの。気持ちが悪いからそのままにしといて」と言う。

あれ、アヤのお釈迦様の心はどこに行ってしまったのかな。アヤが3歳の頃から持っていた博愛の精神はもうなくなってしまったのだろうか。いやそうではないだろう。小さなカニさんをおうちに帰してあげたい気持ちは以前と同じように持っているはずだ。しかし、一方では、怖い、気持ちが悪い、危ない、という感覚が目覚めてくると、博愛の精神と競合するようになる。幼児が持っているお釈迦様の心は、どこまでも無限に広がっていくものではないのだ。

大人だって、蚊に刺されそうになると、バシッとたたいてつぶしてしまうのではないか。これは、人類が持っている防衛本能というものだ。自分にとって「有害、無益」というものと「無害、有益」というものにははっきりと境界線があって、それらは互いに相容れないものなのだ。だから、「無害、有益」のものにはどこまでも博愛の精神が広がっていくのに、「有害、無益」のものには慈悲は及ばない。自然の摂理である。

こうした対立し合う二つの感情は、人間精神を成長させるのであろうが、そのまま放置すれば、相対立する者同士の憎悪や争いをも生み出し、平和であるべき世界が崩れ去る元にもなる。幼児に宿った博愛の精神を無制限に広げることができないにせよ、その芽を絶やさないで可能な限り広げる努力を続けることは必要ではないだろうか。



プロフィール むた・たいぞう 1937年、福岡県生まれ。九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、理学博士。京都大学助手・助教授、広島大学教授・学長、福山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀樹のことば」(丸善出版)、「電磁力学」(岩波書店)、「量子力学」(裳華房)などがある。東広島市在住。

「心のめばえ」のバックナンバーは、牟田のホームページでも読むことができます。下のQRコードをスマートフォンなどで読み取ると簡単にアクセスできます。



ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@pressnet.co.jp
「心のめばえ」係へ